

野菊の墓

伊藤左千夫



後の月のちという時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼い訣わけとは思うが何分にも忘れることが出来ない。もはや十年余よも過去つた昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今なお昨日の如く、その時の事を考えてると、全く当時の心持に立ち返つて、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態で、忘れようと思うこともないではないが、寧ろ繰返し繰返し考えては、夢幻的の興味を貪むさぼつて居る事が多い。そんな訣わけから一寸物ちよつとに書いて置こうかという気になつたのである。

僕の家というのは、松戸から二里ばかり下つて、矢切やぎりの渡わたしを東へ渡り、小高い岡の上でやはり矢切村と云つてる所。矢切の斎藤と云えば、この界限かいがいでの旧家で、里見の崩れが二三人ここへ落ちて百姓になつた内の一人が斎藤と云つたのだと祖父から

聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るような椎しいの樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の忌森いもりで村じゅうから羨うらやましがられて居る。昔から何ほど暴風あらしが吹いても、この椎森のために、僕の家ばかりは屋根を剥はがれたことはただの一度もな
いとの話だ。家なども随分と古い、柱が残らず椎の木だ。それがまた煤すすやら垢あかやらで何の木か見別けがつかぬ位、奥の間の最も煙に遠いところでも、天井板がまるで油炭で塗った様に、板の
木目もくめも判らぬほど黒い。それでも建ちは割合に高く、簡単な欄間らんまもあり銅の釘隠くぎかくしなども打つてある。その釘隠が馬鹿に大きい雁がんであつた。勿論もちろん一寸見たのでは木か金かも知れないほど古
びている。

僕の母なども先祖の言い伝えだからといって、この戦国時代の遺物的古家を、大へんに自慢されていた。その頃母は血の道

で久しく煩わづらつて居られ、黒塗的な奥の一間がいつも母の病褥びょうじよくとなつて居た。その次の十畳の間の南隅みなみすみに、二畳の小座敷がある。僕が居ない時は機織はたおり場で、僕が居る内は僕の読書室よみかみにしていた。てすりまど手摺窓の障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空あおぞらを遮おさつて北を掩おほうている。

母が永らくぶらぶらして居たから、市川の親類で僕には縁いとこの従妹いとこになつて居る、民子という女の児が仕事の手伝やら母の看護やらに来て居つた。僕が今忘れることが出来ないというのは、その民子と僕との関係である。その関係と云つても、僕は民子と下劣な関係をしたのではない。

僕は小学校を卒業したばかりで十五歳、月を数えると十三歳何ヶ月という頃、民子は十七だけれどそれも生れおそが晩いから、十五と少しにしかならない。瘦やせぎすであつたけれども顔は丸

い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味あかみをおんだ、誠に光沢つやの好い児であつた。いつでも活々いきいきとして元気がよく、その癖気は弱くて憎気の少しもない児であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の座敷へ這入はいつてくる、私も本が読みたいの手習がしたいのと云う、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かつた。

母からいつでも叱られる。

「また民やは政の所へ這入はいつてるナ。コラアさつさと掃除をやつてしまえ。これからは政の読書の邪魔などしてはいけません。民やは年上の癖に……」

などと頻しきりに小言を云うけれど、その実母じつも民子をば非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などと時々民子はだだをいう。そういう時の母の小言もきまつている。

「お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫えなくては女いちにんまえ一人前として嫁にゆかれません」

この頃僕に一点の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しも無かつたに相違ない。しかし母がよく小言を云うにも拘かかわらず、民子はなお朝の御飯だ昼の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて来て、本を見せろの筆を借せのと云つてはしばらく遊んでいゝる。その間にも母の薬を持ってきた帰りや、母の用を達たした帰りには、きつと僕の所へ這入つてくる。僕も民子がのぞかない

日は何となく淋しく物足らず思われた。今日は民さんは何をしているかナと思ひ出すと、ふらふらツと書室を出る。民子を見にゆくというほどの心ではないが、一寸民子の姿が目に触れれば気が落着くのであつた。何のこつたやつぱり民子を見に来たんじゃないかと、自分で自分を嘲あざけつた様なことがしばしばあつたのである。

村の或家さ瞽女ごぜがとまつたから聴きにゆかないか、祭文さいもんがきたから聴きに行こうのと近所の女共が誘うても、民子は何とか断りを云うて決して家を出ない。隣村の祭で花火や飾物があるからとの事で、例の向うのお浜や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくというに、内のものらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云うても、民子は母の病気を言い前にして行かない。僕も余りそんな所へ出るは嫌いやであつたから家に居る。民子は狐鼠こそこそ

と僕の所へ這入つてきて、小声で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニツコリ笑う。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置き四日置きに母の薬を取りに松戸へゆく。どうかすると帰りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見ていたそうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は真面目まじめになつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でいというからだと言いわい訣わけをする。家の者は皆ひそひそ笑つているとの話であつた。

そういう次第だから、作おんなのお増などは、無上むしやうと民子を小面憎こづらがつて、何かというと、

「民子さんは政夫さんとこへ許り行きたがる、隙ひまさえあれば政夫さんにこびりついている」

などと頻りに云いはやしたらしく、隣のお仙や向うのお浜等までかれこれ噂をする。これを聞いてか嫂あによめが母に注意したらしく、或日母は常になくむずかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り気な小言を云うた。

「男も女も十五六になればもはや児供こどもではない。お前等二人が余り仲が好過ぎるとて人がかれこれ云うそうじゃ。気をつけなくてはいけない。民子が年かきの癖によくはない。これからはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子わがこを許すではないが政は未だ児供だ。民やは十七ではないか。つまらぬ噂をされるとお前の体に疵きずがつく。政夫だつて気をつけろ……。来月から千葉の中学へ行くんじゃないか」

民子は年が多いし且かつは意味あつて僕の所へゆくであろうと思われたと気がついたか、非常に愧はじ入った様子に、顔真赤にし

て俯向うつむいている。常は母に少し位小言云われても随分だだをいうのだけれど、この日はただ両手をついて俯向いたきり一言もいわない。何の疚やましい所のない僕は頗すこぶる不平で、

「お母さん、そりや余り御無理です。人が何と云ったって、私等は何の訣もないのに、何か大変悪いことでもした様なお小言じゃありませんか。お母さんだっけいつもそう云ってたじゃありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつでも云つたじゃありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云われようとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらかの理はある。母は俄にわかにやさしくなつて、

「お前達に何の訣もないことはお母さんも知つてるがネ、人の

口がうるさいから、ただこれから少し気をつけてと云うのです」
色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが
湛たえて居る。やがて、

「民やはあのまた葉を持つてきて、それから縫掛あわせけの裕あを今日
中に仕上げてしまいなさい……。政は立つた次手ついでに花を剪きつて
仏壇へ捧あげて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑しおんでも
切つてくれよ」

本人達は何の気なしであるのに、人がかれこれ云うのでかえつ
て無邪気でいられない様になってしまう。僕は母の小言も一日し
か覚えていない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は来ないのか
知らんと思つた位であつたけれど、民子の方では、それからと
いうものは様子がからつと變つてしもうた。

民子はその後僕の所へは一切顔出ししないばかりでなく、座

敷の内で行逢つても、人のいる前などでは容易に物も云われない。何となく極^{きま}りわるそうに、まぶしい様な風で急いで通り過ぎて終^{よんどころ}う。抛^{よんどころ}処なく物を云うにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まって口をきくのである。時には僕が余り俄に改まったのを可笑^{おか}しがって笑えば、民子も遂には袖で笑いを隠して逃げてしまふという風で、とにかく一重の垣が二人の間に結ばれた様な気合になった。

それでも或日の四時過ぎに、母の云いつけで僕が背戸の茄子畑^{なすばたけ}に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子が笹^{ざる}を手にとって、僕の後^{あと}にきていた。

「政夫さん……」

出し抜けに呼んで笑っている。

「私もお母さんから云いつかつて来たのよ。今日の縫物は肩が

凝こつたろう、少し休みながら茄子をもいでできてくれ。明日麴漬こうじづけをつけるからつて、お母さんがそう云うから、私飛んできまして

民子は非常に嬉しそうに元氣一パイで、僕が、

「それでは僕が先にきているのを民さんは知らないで来たのと云うと民子は、

「知らなくてサ」

にこにこしながら茄子を採り始める。

茄子畑というは、椎森の下から一重の藪やぶを通り抜けて、家よ

り西北に当る裏せんだいの前栽畑いぼたけ。崖がけの上になつてるので、利根川は勿

論中川までもかすかに見え、武蔵一えんが見渡される。秩父か

ら足柄箱根の山山、富士の高峯たかねも見える。東京の上野の森だと

云うのもそれらしく見える。水のように澄みきった秋の空、日

は一問半ばかりの辺に傾いて、僕等二人が立って居る茄子畑を正面に照り返して居る。あたり一体にシンとしてまた如何にもハッキリとした景色、吾等二人は真に画中の人である。

「マア何という好い景色でしょう」

民子もしばらく手をやめて立った。

僕はここで白状するが、この時の僕は慥たしかに十日以前の僕ではなかった。二人は決してこの時無邪気な友達ではなかった。いつの間にかそういう心持が起つて居たか、自分には少しも判らなかつたが、やはり母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな恋の卵が幾個いくつか湧きそめて居つたに違いない。僕の精神状態がいつの間にか変化してきたは、隠すことの出来ない事実である。この日初めて民子を女として思ったのが、僕に邪念の萌芽めざしありし何よりの証拠じゃ。

民子が体をくの字にかがめて、茄子をもぎつつあるその横顔を見て、今更のように民子の美しく可愛らしさに気がついた。これまでにも可愛らしいと思わぬことはなかつたが、今日はしみじみとその美しさが身にしみた。しなやかに光沢のある鬢の毛につつまれた耳たぼ、豊かな頬の白く鮮かな、顎のくくしめの愛らしさ、頸のあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染の襷や、それらが悉く優美に眼にとまつた。そうなると思ろしいもので、物を云うにも思い切つた言は云えなくなる、羞かしくなる、極りが悪くなる、皆例の卵の作用から起ることである。

ここ十日ほど仲垣の隔てが出来て、ロクロク話もせなかつたから、これも今までならば無論そんなこと考えもせぬにきまつて居るが、今日はここで何か話さねばならぬ様な気がした。僕

は初め無造作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞ことばが継がない。おかしく喉のどがつまって声が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら体を起して、

「政夫さん、なに……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすつかり嫌いになったようなもの」

民子はさすがに女性にょしやうで、そういうことには僕などより遙に神経が鋭敏になっている。さも口惜くやしそうな顔して、つと僕の側へ寄つてきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいつ政夫さんに隔てをしました……」

「何さ、この頃民さんは、すっかり変つちまって、僕なんかには用はないらしいからよ。それだつて民さんに不足を云う訣では

ないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いうはそりや政夫さんひどいわ、御無理だわ。この間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたじゃありませんか。あなたは男ですから平気でお出でだけど、私は年は多いし女ですもの、あア云われては実に面目がないじゃありませんか。それですから、私は一生懸命になつてたしなんで居るんです。それを政夫さん隔てるの嫌になつたろうのと云うんだもの、私はほんとにつまらない……」

民子は泣き出しそうな顔つきで僕の顔をじいツと視^みている。僕もただ話の小口にそう云うたまでであるから、民子に泣きそうになられては、かわいそうに気の毒になつて、

「僕は腹を立って言ったでは無いのに、民さんは腹を立った

の……僕はただ民さんが俄に變つて、逢つても口もきかず、遊びにも来ないから、いやに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだからこれからも時時は遊びにお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎とがを背負うから……人が何と云つたつてよいじゃないか」

何といつても児供だけに無茶なことをいう。無茶なことを云われて民子は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごつたになつて争うたけれど、とうとう嬉しい方が勝を占めて終つた。なお二三言四言話をするうちに、民子は鮮かな曇りのない元の元気になつた。僕も勿論愉快が溢あふれる……、宇宙間にただ二人きり居るような心持にお互になつたのである。やがて二人は茄子のもぎくらをする。大きな畑だけれど、十月の半過ぎでは、茄子もちらほらしかなつて居ない。

二人で漸く二升ばかり宛ずつを採り得た。

「まア民さん、御覧なさい、入日の立派なこと」

民子はいっしか箆を下へ置き、両手を鼻の先に合せて太陽を拝んでいる。西の方の空は一体に薄紫にぼかした様な色になった。ひた赤く赤いばかりで光線の出ない太陽が今その半分を山に埋めかけた処、僕は民子が一心入日を拝むしおらしい姿が永く眼に残つてる。

二人が余念なく話をしながら帰つてくると、背戸口の四つ目垣の外にお増がぼんやり立って、こつちを見て居る。民子は小声で、

「お増がまた何とか云いますよ」

「二人共お母さんに云いつかつて来たのだから、お増なんか何と云つたつて、かまやしないさ」

一事件を経る度に二人が胸中に湧いた恋の卵は層を増して行く。機に触れて交換する双方の意志は、直に互いの胸中にある例の卵に至大な養分を給与する。今日の日暮はたしかにその機であつた。ぞつと身振いをするほど、著しき徴候を現したのである。しかし何というても二人の関係は卵時代で極めて取りとめがない。人に見られて見苦しい様なこともせず、顧みて自ら疚しい様なこともせぬ。従つてまだまだ暢気なもので、人前を繕うと云う様な心持は極めて少なかつた。僕と民子との関係も、この位でお終いになつたならば、十年忘れられないというほどにはならなかつただらうに。

親というものはどこの親も同じで、吾子をいつまでも児供のように思っている。僕の母などもその一人に漏れない。民子はその後時折僕の書室へやってくるけれど、よほど人目を計らつ

て気ほねを折ってくる様な風で、いつきても少しも落着かない。先に僕に厭味いやみを云われたから仕方なしにくるかとも思われたが、それは間違っていた。僕等二人の精神状態は二三日と云われぬほど著しき変化を遂げている。僕の変化は最も甚はなはだしい。三日前には、お母さんが叱れば私が科とがを背負うから遊びにきてとまで無茶を云うた僕が、今日はとてもそんな訣のものでない。民子が少し長居をすると、もう気が咎めて心配でならなくなった。

「民さん、またお出いでよ、余り長く居ると人がつまらぬことを云うから」

民子も心持は同じだけれど、僕にもう行けと云われると妙にすねだす。

「あれあなたは先日何と云いました。人が何と云ったッてよいから遊びに来いと云いはしませんか。私はもう人に笑われても

かまいませんの」

困つた事になつた。二人の關係が密接するほど、人目を恐れてくる。人目を恐れる様になつては、もはや罪惡を犯しつつあるかの如く、心もおどおどするのであつた。母は口でこそ、男も女も十五六になれば児供ではないと云つても、それは理窟の上のこと、心持ではまだまだ二人をまるで児供の様に思っているから、その後民子が僕の室へやへきて本を見たり話をしたりしているのを、直ぐ前を通りながら一向氣に留める様子もない。この間の小言も実は嫂あによめが言うから出たまでで、ほんとうに腹から出た小言ではない。母の方はそうであつたけれど、兄や嫂やお増などは、盛に蔭言をいうて笑つていたらしく、村中の評判には、二つも年の多いのを嫁にする気かしらんなどと専もつぱらいうているとの話。それやこれやのことが薄々二人に知れたので、僕

から言いだして当分二人は遠ざかる相談をした。

人間の心持というものは不思議なもの。二人が少しも隔意なき得心上の相談であったのだけれど、僕の方から言い出したばかりに、民子は妙に鬱ふさぎ込んで、まるで元気がなくなり、悄然しょうぜんとしていたのである。それを見ると僕もまたたまらなく気のもどくなる。感情の一進一退はこんな風にもつれつつ危くなるのである。とにかく二人は表面だけは立派に遠ざかって四五日を経過した。

陰暦の九月十三日、今夜が豆の月だという日の朝、露霜が降りたと思うほどつめたい。その代り天気はきらきらしている。十五日がこの村の祭で明日は宵祭という訣わけ故ゆえ、野の仕事も今日一渡り極きまりをつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出

ることになった。それで甘露的恩命が僕等ふたり兩人に下つたのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稻なかくての刈残りを是非刈つて終しまわねばならぬ。民子は僕を手伝いとして山畑の棉わたを採つてくることになった。これはもとより母の指図で誰にも異議は云えない。

「マアあの二人を山の畑へ遣るツて、親というものよツぽどお目出たいものだ」

奥底のないお増と意地曲りの嫂とは口を揃えてそう云つたに違いない。僕等二人はもとより心の底では嬉しいに相違ないけれど、この場合二人で山畑へゆくとなつては、人に顔を見られる様な気がして大いに極りが悪い。義理にも進んで行きたがる様な素振りには出来ない。僕は朝飯前は書室を出ない。民子も何か愚図愚図して支度もせぬ様子。もう嬉しがつてと云われるの

が口惜しいのである。母は起きてきて、

「政夫も支度しろ。民やもさつきと支度して早く行け。二人でゆけば一日には楽な仕事だけれど、道が遠いものだから、早く行かないと帰りが夜になる。なるたけ日の暮れない内に帰つてく
る様によ。お増は二人の弁当を拵こしらえてやつてくれ。お菜はこれ
これの物で……」

まことに親のこころだ。民子に弁当を拵こしらえさせては、自分の
であるから、お菜などはロクな物を持って行かないと気がつい
て、ちやんとお増に命じて拵こしらえさせたのである。僕はズボン下
に足袋たび裸足はだし麦藁帽むぎわらぼうという出で立ち、民子は手指てさしを佩はいて股引ももひきも
佩はいてゆけと母が云うと、手指てさしばかり佩はいて股引ももひき佩はくのにぐず
ぐずしている。民子は僕のところへきて、股引佩はかないでもよ
い様にお母さんにそう云つてくれと云う。僕は民さんがそう云

いなさいと云う。押問答をしている内に、母はききつけて笑いながら、

「民やは町場者まちばものだから、股引佩くのは極りが悪いかい。私はまたお前が柔かい手足へ、茨いばらや薄すすきで傷をつけるが可哀相だから、そう云つたんだが、いやだと云うならお前のすきにするがよいさ」

それで民子は、例の襷たすきに前掛姿で麻裏草履という支度。二人が一斗箆ひとつずつ一個宛を持ち、僕が別に番ばんニヨ片籠かたかごと天秤てんびんとを肩にして出掛ける。民子が跡から菅笠すげがさを被かむつて出ると、母が笑声で呼びかける。

「民や、お前が菅笠を被つて歩くと、ちようど木の子が歩くようで見つともない。編笠がよかろう。新らしいのが一つあつた箆すげだ」

稲刈連は出てしまつて別に笑うものもなかつたけれど、民子はあわてて菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかつた。今度は編笠を被らずに手に持つて、それじゃお母さんいつてまいりますと挨拶して走つて出た。

村のものらもかれこれいうと聞いてるので、二人揃うてゆくも人前恥かしく、急いで村を通抜けようとの考えから、僕は一足先になつて出掛ける。村はずれの坂の降口おりぐちの大きな銀杏いちようの樹の根で民子のくるのを待つた。ここから見おろすと少しの田圃たんぼがある。色よく黄ばんだ晩稲おくてに露をおんで、シットリと打伏した光景は、気のせいすがすがか殊に清々しく、胸のすくような眺めである。民子はいつの間にか来ていて、昨日の雨で洗い流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちるのを拾っている。

「民さん、もうきたかい。この天気の良いことどうです。ほん

とに心持のよい朝だねイ」

「ほんとに天氣がよくて嬉しいわ。このまア銀杏の葉の綺麗な
こと。さア出掛けましょう」

民子の美しい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。
二人は坂を降りてようやく窮屈な場所から広場へ出た気になつ
た。今日は大いそぎで棉を採り片付け、さんざん面白いことを
して遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いているが、
両側の田についている所は、露にしとしとに濡ぬれて、いろいろ
の草が花を開いてる。タウコギは末うらが枯れて、水蕎みずそば麦たでなど一番
多く繁さかっている。都草も黄色く花が見える。野菊がよろよると
咲いている。民さんこれ野菊かと僕は吾知らず足を留めたけれ
ど、民子は聞えないのかさつきと先へゆく。僕は一寸脇わきへ物を
置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行つてから、気がついて振り返るや否や、あれツと叫んで駆け戻つてきた。

「民さんはそんなに戻つてきかないツたつて僕が行くものを……」
「まア政夫さんは何をしてたの。私びツくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれツたら、私ほんとうに野菊が好き」

「僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」
「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振いの出るほど好^{この}もしいの。どうしてこんなかと、自分でも思う位」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しかった。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊の様だつてどうしてですか」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだつて……」

「僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になつてと云いながら、自らは後になった。今の偶然に起つた簡単な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。民子もそう思つた事はその素振りで見解。ここまで話が迫ると、もうその先を言い出すことは出来ない。話は一寸途切れてしまつた。

何と言つても若い兩人は、今罪の神にほんろう翻弄せられつつあるの

であれど、野菊の様な人だと云つた詞について、その野菊を僕はだいい好きだと云つた時すら、僕は既に胸にどうき動悸を起した位で、

直ぐにそれ以上を言い出すほどに、まだまだずうずうしくはなつていない。民子も同じこと、物に突きあたつた様な心持で強くお互に感じた時に声はつまつてしまつたのだ。二人はしばらく無言で歩く。

まこと
真に民子は野菊の様な児であつた。民子は全くの田舎風ではあつたが、決して粗野ではなかつた。可憐かれんで優しくてそうして品格もあつた。厭味とか憎気とかいふ所は爪あかの垢あかほどもなかつた。どう見ても野菊の風だつた。

しばらくは黙つていたけれど、いつまで話もしないでいるはなおおかしい様に思つて、無理と話を考え出す。

「民さんはさつき何を考えてあんなに脇見もしないで歩いていたの」

「わたし何も考えていやしません」

「民さんはそりや嘘だよ。何か考えごとでもしなくてあんな風をする訣はないさ。どんなことを考えていたのか知らないけれど、隠さないだつてよいじゃないか」

「政夫さん、済まない。私さつきほんとに考事かんがえごとしていました。私つくづく考えて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多いんでしょう。私は十七だと言うんだもの、ほんとに情なくなるわ……」

「民さんは何のこと言うんだらう。先に生れたから年が多い、十七年育つたから十七になつたのじゃないか。十七だから何で情ないのですか。僕だつて、さ来年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云う人だ」

僕も今民子が言ったことの心を解せぬほど児供でもない。解つてはいるけど、わざと戯れの様に聞きなして、振りかえつて見

ると、民子は真に考え込んでいる様であつたが、僕と顔合せて極りわるげににわかわきに側を向いた。

こうなつてくると何をいうても、直ぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまふ。二人の内でもどちらか一人が、すこしほんの僅かにでも押が強ければ、こんなに話がゆきつまるのではない。お互に心持は奥底まで解つていふのだから、吉野紙を突破するほどにも力がありさえすれば、話の一步を進めてお互に明放してしまふことが出来るのである。しかしながら真底からおぼこな二人は、その吉野紙を破るほどの押がないのである。またここで話の皮を切つてしまわねばならぬと云う様な、はつきりした意識も勿論ないのだ。言わば未だ取止めのない卵的の恋であるから、少しく心の力が必要な所へくると話がゆきつまつてしまふのである。

お互に自分で話し出しては自分が極りわるくなる様なことを繰返しつつ幾町かの道を歩いた。詞数こそ少なけれ、その詞の奥には二人共に無量の思いを包んで、極りがわるい感情の中には何とも云えない深き愉快を湛えて居る。それでいわゆる足も空に、いつしか田圃も通りこし、山路へ這入った。今度は民子
が心を取り直したらしく鮮かな声で、

「政夫さん、もう半分道来ましてしよるか。大長柵おおながさくへは一里に遠いッて云いましたねイ」

「そうです、一里半には近いそうだが、もう半分の余来ましたろうよ。少し休みましようか」

「わたし休まなくとも、ようございませうが、早速お母さんの罰があたつて、薄すすきの葉でこんなすずきに手を切りました。ちよいとこれで結わえて下さいな」

親指の中ほどで疵は少しだが、血が意外に出た。僕は早速紙を裂いて結わえてやる。民子が両手を赤くしているのを見た時非常にかわいそうであつた。こんな山の中で休むより、畑へ往つてから休もうといふので、今度は民子を先に僕が後になつて急ぐ。八時少し過ぎと思ふ時分に大長柵の畑へ着いた。

十年許りに前に親父が未だ達者な時分、隣村の親戚から頼まれて余儀なく買ったのだそうで、畑が八反と山林が二町ほどここにあるのである。この辺一体に高台は皆山林でその間の柵が畑になつて居る。越石を持つていると云えば、世間体はよいけど、手間ばかり掛つて割に合わないといつても母が言つてる畑だ。

三方林で囲まれ、南が開いて余所の畑とつづいている。北が高く南が低い傾斜になつてゐる。母の推察通り、棉は末にはなつてゐるが、風が吹いたら溢れるかと思ふほど棉はえんでゐる。

点々として畑中白くなっているその棉に朝日がさしていると目まぶしい様に綺麗だ。

「まあよくえんでること。今日採りにきてよい事しました」

民子は女だけに、棉の綺麗にえんでるのを見て嬉しそうにそう云った。畑の真中ほどに桐の樹が二本繁っている。葉が落ちてかけて居るけれど、十月の熱を凌しのぐには十分だ。ここへあたりきびがらの黍殻を寄せて二人が陣どる。弁当包みを枝へ釣る。天気の良いのに山路を急いだから、汗ばんで熱い。着物を一枚ずつ脱ぐ。風を懐ふところへ入れ足を展のばして休む。青ぎった空に翠みどりの松林、百舌もずもどこかで鳴いている。声の響くほど山は静かなのだ。天と地との間で広い畑の真中に二人が話をしているのである。

「ほんとに民子さん、きょうというきょうは極楽の様な日ですねイ」

顔から頸から汗を拭いた跡のつやつやしき、今更に民子の横顔を見た。

「そうですねイ、わたし何だか夢の様な気がするの。今朝家を出る時はほんとに極りが悪くて……嫂ねえさんには変な眼つきで視られる、お増には冷かされる、私はのぼせてしまいました。政夫さんは平気でいるから憎らしかったわ」

「僕だつて平気なもんですか。村の奴らに逢うのがいやだから、僕は一足先に出て銀杏の下で民さんを待つていたんでさア。それはそうと、民さん、今日はほんとに面白く遊ぼうね。僕は来月は学校へ行くんだし、今月とて十五日しかないし、二人でしみじみ話の出来る様なことはこれから先はむずかしい。あわれッぽいこと云うようだけど、二人の中も今日だけかしらと思うのよ。ねイ民さん……」

「そりゃア政夫さん、私は道々そればかり考えて来ました。私
がさつきほんとは情なくなつてと言つたら、政夫さんは笑つて
おしまいなしたけど……」

面白く遊ぼう遊ぼう言うても、話を始めると直ぐにこうなつ
てしまう。民子は涙を拭うた様であつた。ちようどよくそこへ
馬が見えてきた。西側の山路から、がさがさ笹にさわる音がし
て、薪たきぎをつけた馬を引いて頬冠ほおかむりの男が出て来た。よく見ると意
外にも村の常吉である。この奴はいつか向うのお浜に民子を遊
びに連れだしてくれと頻しきりに頼んだという奴だ。いやな野郎が
きやがつたなと思つていと、

「や政夫さん。コンチャどうも結構なお天気ですな。今日は御
夫婦で棉採りかな。洒落しやれてますね。アハハハハハ」

「オウ常さん、今日は駄賃かな。大変早く御精が出ますね」

「ハア吾々なんざア駄賃取りでもして適たまに一盃いっぱいやるより外に樂しみもないんですからな。民子さん、いやに見せつけますね。余あんまり罪ですぜ。アハハハハハ」

この野郎失敬なと思つたけれど、吾々も余り威張れる身でもなし、笑いとぼけて常吉をやり過ごした。

「馬鹿野郎、実に厭なやつだ。さア民さん、始めましょう。ほんとに民さん、元氣をお直しよ。そんなにくよくよおしでないよ。僕は学校へ行つたて千葉だもの、盆正月の外にも来ようと思えば土曜の晩かけて日曜なまつらに来られるさ……」

「ほんとに済みません。泣面なみつらなどして。あの常さんて男、何と
いういやな人でしょう」

民子は襷掛け僕はシャツに肩を脱いで一心に採つて三時間ばかりの間に七分通り片づけてしまった。もう跡はわけがないか

ら弁当にしようということにして桐の蔭に戻る。僕はかねて用意の水筒を持って、

「民さん、僕は水を汲くんで来ますから、留守番を頼みます。帰りに『えびづる』や『あけび』をうんと土産みやげに採とつて来ます」

「私は一人で居るのはいやだ。政夫さん、一所に連れてつて下さい。さっきの様な人にでも来られたら大変ですもの」

「だって民さん、向うの山を一つ越して先ですよ、清水しみずのある所は。道という様な道もなくて、それこそ茨いばらや薄すすきで足が疵きずだらけになりますよ。水がなくなっちゃ弁当が食べられないから、困つたなア、民さん、待まちつていられるでしょう」

「政夫さん、後生だから連れて行って下さい。あなたが歩ける道なら私にも歩けます。一人でここにいるのはわたしやどうしでも……」

「民さんは山へ来たたら大変だだッ児になりましたネー。それじゃ一所に行きましよう」

弁当は棉の中へ隠し、着物はてんでに着てしまつて出掛ける。民子は頻りに、にこにこしている。端はたから見たならば、馬鹿馬鹿しくも見苦しくもあるうけれど、本人同志の身にとつては、そのらちなき押問答の内にも限りなき嬉しみを感ずるのである。高くもないけど道のない所をゆくのであるから、笹原を分け樹の根につかまり、崖を攀よずる。しばしば民子の手を採つて曳ひいてやる。

近く二三日以来の二人の感情では、民子が求めるならば僕はどんなことでも拒まれない、また僕が求めるならやはりどんなことでも民子は決して拒みはしない。そういう間柄でありつつも、飽くまで臆病に飽くまで気の小さなふたり二人は、嘗かつて一度も有

意味に手などを採つたことはなかつた。しかるに今日は偶然の事から屡手を採り合うに至つた。這辺このへんの一種云うべからざる愉快な感情は経験ある人にして初めて語ることが出来る。

「民さん、ここまですれば、清水はあすこに見えます。これから僕が一人で行つてくるからここに待つて居なさい。僕が見えて居たら居られるでしょう」

「ほんとに政夫さんの御厄介ですね……そんなにだだを言つては濟まないから、ここで待ちましょう。あらア野葡萄えびづるがあつた」

僕は水を汲んでの帰りに、水筒は腰に結いつけ、あたりを少し許り探つて、『あけび』四五十と野葡萄一もくさを採り、竜胆りんどうの花の美しいのを五六本見つけて帰つてきた。帰りは下りだから無造作に二人で降りる。畑へ出口で僕は春蘭しゅんらんの大きいの見つけた。

「民さん、僕は一寸『アツクリ』を掘ってゆくから、この『あけび』と『えびづる』を持って行って下さい」

「『アツクリ』てなに。あらア春蘭じゃありませんか」

「民さんは町場もんですから、春蘭などと品のよいこと仰おつしやるのです。矢切の百姓なんぞは『アツクリ』と申しましてね、あかぎれ鞆たもとの薬に致します。ハハハハ」

「あらア口の悪いこと。政夫さんは、きょうはほんとに口が悪くなつたよ」

山の弁当と云えば、土地の者は一般に楽しみの一つとしてある。何か生理上の理由でもあるか知らんが、とにかく、山の仕事をしてやがてたべる弁当が不思議とうまいことは誰も云う所だ。今吾々二人は新らしき清水を扱み来り母の心を籠こめた弁当を分けつつたべるのである。興味の尋常でないは言うも愚おろかな次

第だ。僕は『あけび』を好み民子は野葡萄をたべつつしばらく話をする。

民子は笑いながら、

「政夫さんは鞆の葉に『アツクリ』とやらを採ってきて学校へお持ちになるの。学校で鞆がぎれたらおかしいでしょうね……」

僕は真面目に、

「なアにこれはお増にやるのさ。お増はもうとうに鞆を切らしているでしょう。この間も湯に這入る時にお増が火を焚たきにきて非常に鞆を痛がつているから、その内に僕が山へ行ったら「アツクリ」を採ってきてやると言ったのさ」

「まアあなたは親切な人ですことね……お増は蔭日向かげひなたのない憎気のない女ですから、私も仲好くしていたんですが、この頃は何となし私に突き当る様な事ばかり言つて、何でもわたしを憎

んでいますよ」

「アハハハ、それはお増どんが焼餅をやくのでき。つまらんことにもすぐ焼餅を焼くのは、女の癖さ。僕がそら『アツクリ』を採つていってお増にやると云えば、民さんがすぐに、まアあなたは親切な人とか何とか云うのと同じ訣わけさ」

「この人はいつのまにこんな口がわるくなつたのでしよう。何を言つても政夫さんにはかないやしない。いくら私だつてお増が根も底もない焼もちだ位は承知していますよ……」

「実はお増ふびんも不憫な女よ。両親があんなことになりさえせねば、奉公人とまでなるのではない。親父は戦争で死ぬ、お袋はこれを嘆いたがもとでの病死、一人の兄がはずれものという訣で、とうとうあの始末。国家のために死んだ人の娘だもの、民さん、いたわつてやらねばならない。あれでも民さん、あなたをば大

変ほめているよ。意地曲りの嫂にこきつかわれるのだから一層かわいそうでさ」

「そりや政夫さん私もそう思つて居ますさ。お母さんもよくそうおつしやいました。つまらないものですけど何とかかとか分けてやってますが、また政夫さんの様に情深くされると……」

民子は云いさしてまた話を詰らしたが、桐の葉に包んで置いた竜胆の花を手に採つて、急に話を転じた。

「こんな美しい花、いつ採つてお出でなして。りんどうはほんとはよい花ですね。わたしりんどうがこんなに美しいとは知らなかつたわ。わたし急にりんどうが好きになつた。おオエエ花……」

花好きな民子は例の癖で、色白の顔にその紫紺の花を押しつける。やがて何を思いだしてか、ひとりでにこにこ笑いだした。

「民さん、なんです、そんなにひとりですって笑つて」

「政夫さんはりんどろの様な人だ」

「どうして」

「さアどうしてといふことはないけど、政夫さんは何がなし竜胆の様な風だからさ」

民子は言い終つて顔をかくして笑つた。

「民さんもよつぽど人が悪くなつた。それでさっきの仇討あだうちという訣ですか。口真似なんか恐入りますナ。しかし民さんが野菊で僕が竜胆とは面白い対ですね。僕は悦よろこんでりんどろになります。それで民さんがりんどろを好きになつてくれればなお嬉し
い」

二人はこんならちもなき事いうて悦んでいた。秋の日足の短さ、日はようやく傾きそめる。さアとの掛声で棉もぎにかかる。

午後の分は僅であつたから一時間半ばかりでもぎ終えた。何やかやそれぞれまとめて番二ヨに乗せ、二人で差しあいにかつぐ。民子を先に僕が後に、とぼとぼ畑を出掛けた時は、日は早く松の梢をかぎりかけた。

半分道も来たと思う頃は十三夜の月が、木のこ間から影をさして尾花にゆらぐ風もなく、露の置くさえ見える様な夜になつた。今朝は気がつかなくつたが、道の西手に一段低い畑には、蕎麦そばの花が薄絹を曳き渡したように白く見える。こおろぎが寒げに鳴いているにも心とめずにはいられない。

「民さん、くたぶれたでしょう。どうせおそくなつたんですから、この景色のよい所で少し休んで行きましょう」

「こんなにおそくなるなら、今少し急げばよかつたに。家の人達にきつと何とか言われる。政夫さん、私はそれが心配になる

わ

「今更心配しても追つかないから、まあ少し休みましょう。こんな景色のよいことは滅多にありません。そんなに人に申訣のない様な悪いことはしないもの、民さん、心配することはないよ」

月あかりが斜にさしこんでいる道端の松の切株に二人は腰をかけた。目の先七八間の所は木の蔭で薄暗いがそれから向うは畑一ぱいに月がさして、蕎麦の花が際立つて白い。

「何というえい景色でしょう。政夫さん歌とか俳句とかいうものをやったら、こんなときに面白いことが云えるでしょうね。私ら様な無筆でもこんな時には心配も何も忘れますもの。政夫さん、あなた歌をおやんなさいよ」

「僕は実は少しやっているけど、むずかしくて容易に出来ない

のさ。山畑の蕎麦の花に月がよくて、こおろぎが鳴くなどは実にいいですなア。民さん、これから二人で歌をやりましょうか」

お互に一つの心配を持つ身となった二人は、内に思うことが多くてかえって話は少ない。何となく覚束おぼつかない二人の行末、ここで少しく話をしたかったのだ。民子は勿論のこと、僕よりも一層話したかったに相違ないが、年の至らぬのと浮いた心のない二人は、なかなか差向いでそんな話は出来なかつた。しばらくは無言でぼんやり時間を過ごすうちに、一列の雁がんが二人を促すかの様に空近く鳴いて通る。

ようやく田圃へ降りて銀杏の木が見えた時に、二人はまた同じ様に一種の感情が胸に湧いた。それは外でもない、何となく家に這はい入りづらいと言う心持である。這入りづらい訣はないと思つても、どうしても這入りづらい。躊躇ちゆうちゆうする暇もない、忽門たちまち

前近く来てしまった。

「政夫さん……あなた先になつて下さい。私極きまりわるくてしようがないわ」

「よしとそれじゃ僕が先になろう」

僕は頗すこぶる勇気を鼓こし殊に平気な風を装うて門を這入つた。家の人達は今夕飯最中で盛んに話が湧いているらしい。庭場の雨戸は未だ開いたなりに月が軒口までさし込んでゐる。僕が咳せきばらい払を一つやつて庭場へ這入ると、台所の話にはわかには止んでしまつた。民子は指の先で僕の肩を撞ついた。僕も承知してゐるのだ、今御膳会議で二人の噂が如何いかに盛んであつたか。

宵祭ではあり十三夜ではあるので、家中表座敷へ揃そろうた時、母も奥から起きてきた。母は一通り二人の余り遅かつたことを咎めて深くは言わなかつたけれど、常とは全く違つていた。何

か思っているらしく、少しも打解けない。これまでは口には小言を言うても、心中に疑わなかつたのだが、今夜は口には余り言わないが、心では十分に二人に疑いを起したに違いない。民子ははいよいよ小さくなつて座敷中へは出ない。僕は山から採つてきた、あけびや野葡萄えびづるやを沢山座敷中へ並べ立てて、暗に僕がこんな事をして居たから遅くなつたのだとの意を示し無言の弁解をやつても何のききめもない。誰一人それをそうと見るものはない。今夜は何の話にも僕等二人は除けものにされる始末で、もはや二人は全く罪あるものと黙決されてしまったのである。

「お母さんがあんまり甘過ぎる。あアして居る二人を一所に山畑へやるとは目のないにもほどがある。はたでいくら心配してもお母さんがあれでは駄目だ」

これが台所會議の決定であつたらしい。母の方でもいつまで児供と思つていたが誤りで、自分が悪かつたという様な考えに今夜はなつたのである。今更二人を叱つて見ても仕方がない。なに政夫を学校へ遣つてしまひさえせば仔細しさいはないと母の心はちやんときまつて居るらしく、

「政や、お前は十一月へ入つて直ぐ学校へやる積りであつたけれど、そうしてぶらぶらして居ても為にならないから、お祭が終つたら、もう学校へゆくがよい。十七日にゆくとしろ……えいか、そのつもりで小支度して置け」

学校へゆくは固より僕の願ひ、十日や二十日早くとも遅くともそれに仔細はないが、この場合しかも今夜言渡いいわたがあつて見ると、二人は既に罪を犯したものと定められての仕置であるから、民子は勿論僕に取つてもすこぶる心苦しい処がある。實際二人

はそれほどに墮落した訣でないから、頭からそうときめられては、聊ちやうどか妙な心持がする。さりとて弁解の出来ることでもなし、また強いことを言える資格も実は無いのである。これが一ヶ月前であつたらば、それはお母さん御無理だ、学校へ行くのは望みであるけど、科とがを着せられての仕置に学校へゆけとはあんまりでしよう……などと直ぐだだを言うのであるが、今夜はそんな我儘わがままを言えるほど無邪気ではない。全くの処、恋に陥つてしまつてゐる。

あれほど可愛がられた一人の母に隠立てをする、何となく隔てを作つて心のありたけを言い得ぬまでになつてゐる。おのずから人前を憚はばかり、人前では殊更わたくしごとくに二人がうとうとしく取りなす様になつてゐる。かくまで私心が長じてきてどうして立派な口がきけよう。僕はただ一言、

「はア……」

と答えたきりなんにも言わず、母の言いつけに盲従する外はなかつた。

「僕は学校へ往つてしまえばそれでよいけど、民さんは跡でどうなるだろうか」

不^ふ凶^とそう思つて、そつと民子の方を見ると、お増が枝豆をあさつてる後に、民子はうつむいて膝の上に襷^{たすき}をこねくりつつ沈黙している。如何にも元氣のない風で夜のせいか顔色も青白く見えた。民子の風を見て僕も俄に悲しくなつて泣きたくなつた。涙は^{まぶた}瞼を伝つて眼が曇つた。なぜ悲しくなつたか理由は判然^{はつきり}しない。ただ民子が可哀相でならなくなつたのである。民子と僕との楽しい関係もこの日の夜までは続かなく、十三日の昼の光と共に全く消えうせてしまった。嬉しいにつけても思いのたけ

は語りつくさず、憂き悲しいことについては勿論百分の一だも語りあわないで、二人の關係は闇やみの幕に這入ってしまったのである。

十四日は祭の初日でただ物せわしく日がくれた。お互に氣のない風はしていても、手にせわしい仕事のあるばかりに、とにかく思い紛らすことが出来た。

十五日と十六日とは、食事の外用事もないままに、書室へ籠こもりとおしていた。ぼんやり机にもたれたなり何をするでもなく、また二人の關係をどうしようかという様なことすらも考えてはいない。ただ民子のことが頭に充ちているばかりで、極めて単純に民子を思っている外に考えは働いて居らぬ。この二日の間に民子と三四回は逢ったけれど、話も出来ず微笑を交換する元

気もなく、うら淋しい心持を互に目に訴うるのみであつた。二人の心持が今少しまかせて居つたならば、この二日の間にも将来の事など随分話し合うことが出来たのであろうけれど、しぶとい心持などは毛ほどもなかつた二人には、その場合になかなかそんな事は出来なかつた。それでも僕は十六日の午後になつて、何とはなしに以下のような事を巻紙へ書いて、日暮に一寸来た民子に僕が居なくなつてから見てくれと云つて渡した。

朝からここへ這入つたきり、何をする気にもならない。外へ出る気にもならず、本を読む気にもならず、ただ繰返し繰返し民さんの事ばかり思つて居る。民さんと一所に居れば神様に抱かれて雲にでも乗つて居る様だ。僕はどうしてこんなになつたんだらう。学問をせねばならない身だから、学校へは行くけれど、心では民さんと離れたくない。民さんは自分

の年の多いのを気にしているらしいが、僕はそんなことは何とも思わない。僕は民さんの思うとおりになるつもりですから、民さんもそう思っていて下さい。明日は早く立ちます。冬期の休みには帰ってきて民さんに逢うのを楽しみにして居ります。

十月十六日

政夫

民子様

学校へ行くとは云え、罪があつて早くやられると云う境遇であるから、人の笑聲話声にも一々ひがみ心が起きる。皆二人に對する嘲笑かの様に聞かれる。いつそ早く学校へ行つてしまいたくなつた。決心が定まれば元氣も恢復かいふくしてくる。この夜は頭

も少しくさえて夕飯も心持よくたべた。学校のこと何くれとな
く母と話をする。やがて寝に就いてからも、

「何だ馬鹿馬鹿しい、十五かそこの小僧の癖に、女のことな
どばかりくよくよ考えて……そうだそうだ、明朝あしたは早速学校へ
行こう。民子は可哀相だけれど……もう考えまい、考えたつて
仕方がない、学校学校……」

ひとりぐち
独口ききつつ眠りに入った様な訣であつた。

船で河から市川へ出るつもりだから、十七日の朝、小雨の降る
のに、一切の持物をカバンひとつ一個につめ込み民子とお増に送られ
て矢切の渡へ降りた。村の者の荷船に便乗する訣でもう船は来
て居る。僕は民さんそれじゃ……と言うつもりでも咽のどがつまっ
て声が出ない。民子は僕に包を渡してからは、自分の手のやり

ばに困つて胸を撫なでたり襟えりを撫でたりして、下ばかり向いてい
る。眼にもつ涙をお増に見られまいとして、体を脇へそらして
いる、民子があわれな姿を見ては僕も涙が抑え切れなかつた。
民子は今日を別れと思つてか、髪はさつぱりとした銀杏いちようがえ返しに
薄く化粧すすいろをしている。煤色と紺べんけいじまの細かい弁慶べんけいじま縞まで、羽織も長着
も同じい米沢よねざわ紬むすひに、品のよい友禅ゆうぜん縮緬ちりめんの帯をしめていた。襷たすを
掛けた民子もよかつたけれど今日の民子はまた一層引立つて見
えた。

僕の気のせいでもあるか、民子は十三日の夜からは一日ひとひ
日とやつれてきて、この日のいたいたしき、僕は泣かずには居
られなかつた。虫が知らせるとでもいうのか、これが生涯の別
れになろうとは、僕は勿論民子とて、よもやそうは思わなかつ
たろうけれど、この時のつらさ悲しさは、とても他人に話して

も信じてくれるものはないと思う位であつた。

尤も民子の思ひは僕より深かつたに相違ない。僕は中学校を卒業するまでにも、四五年間のある体であるのに、民子は十七で今年の内にも縁談の話があつて両親からそう言われれば、無造作に拒むことの出来ない身であるから、行末のことをいろいろ考えて見ると心配の多い訣である。当時の僕はそこまでは考へなかつたけれど、親しく目に染しみた民子のいたいたしい姿は幾年経つても昨日の事のように眼に浮んでいたのである。

余所から見たならば、若いうちによくあるいたずらの勝手な泣面と見苦しくもあつたであらうけれど、一人の身に取つては、真にあわれに悲しき別れであつた。互に手を取つて後来を語ることも出来ず、小雨のしよぼしよぼ降る渡場に、泣きの涙も人目を憚はばり、一言の詞ことばもかわし得ないで永久の別れをしてしまつ

たのである。無情の舟は流を下つて早く、十分間と経たぬ内に、五町と下らぬ内に、お互の姿は雨の曇りに隔てられてしまった。物も言い得ないで、しよんぼりと悄しおれていた不憫ふびんな民さんの倂おもかげ、どうして忘れることが出来よう。民さんを思うために神の怒りに触れて即座に打殺さるる様なことがあるとても僕には民さんを思わずに居られない。年をとつての後の考えから言えば、あアもしたらこうもしたらと思わぬこともなかったけれど、当時の若い同志どうしの思慮には何らの工夫も無かつたのである。八百屋お七は家を焼いたらば、再度ふたたび思う人に逢われることと工夫をしたのであるが、吾々二人は妻戸一枚を忍んで開けるほどの智慧ちえも出なかつた。それほどに無邪気な可憐な恋でありながら、なお親に怖おじ兄弟に憚り、他人の前にて涙も拭き得なかつたのは如何に気の弱い同志であつたらう。

僕は学校へ行ってからも、とかく民子のことばかり思われて仕方がない。学校に居つてこんなことを考えてどうするものかなどと、自分で自分を叱り励まして見ても何の甲斐もない。そういう詞の尻からすぐ民子のこと湧いてくる。多くの人中に居ればどうにか紛れるので、日の中はなるたけ一人で居ない様に心掛けて居た。夜になつても寝ると仕方がないから、なるたけ人中で騒いで居て疲れて寝る工夫をして居た。そういう始末でようやく年もくれ冬期休業になつた。

僕が十二月二十五日の午前に帰つて見ると、庭一面に糶もみを干してあつて、母は前の縁側に蒲団ふとんを敷いて日向ぼっこをしていた。近頃はよほど体の工合もよい。今日は兄夫婦と男とお増とは山へ落葉くずをはきに行ったとの話である。僕は民さんとは口の先ま

で出たけれど遂に言い切らなかつた。母も意地悪く何とも言わない。僕は帰り早々民子のことを問うのが如何にも極り悪く、そのまま例の書室を片づけてここに落着いた。しかし日暮までには民子も帰ってくるかと思ひながら、おろおろして待つて居る。皆が帰つていよいよ夕飯ということになつても民子の姿は見えない、誰もまた民子のことを一言も言うものもない。僕はもう民子は市川へ帰つたものと察して、人に問うのもいまいましいから、外の話もせず、飯がすむとそれなり書室へ這入つてしまつた。

今日は必ず民子に逢われることと一方ならず楽しみにして歸つて来たのに、この始末で何とも言えず力が落ちて淋しかった。さりとて誰にこの苦悶を話しようもなく、民子の写真などを取出して見て居つたけれど、ちつとも気が晴れない。またあの奴

民子が居ないから考え込んで居やがると思われるも口惜しく、
ようやく心を取直し、母の枕元へいつて夜遅くまで学校の話
をして聞かせた。

翌くる日は九時頃にようやく起きた。母は未だ寝ている。台
所へ出て見ると外の者は皆また山へ往ったとかで、お増が一人
台所片づけに残っている。僕は顔を洗ったなり飯も食わずに、
背戸の畑へ出てしまった。この秋、民子と二人で茄子をとった
畑が今は青々と菜がほきている。僕はしばらく立つて何所を眺
めるともなく、民子の倂を脳中にえがきつつ思いに沈んでいる。

「政夫さん、何をそんなに考えているの」

お増が出し抜けに後からそいつて、近くへ寄つてきた。僕が
よい加減なことを一言二言いうと、お増はいきなり僕の手をとつ
て、も少しこつちへきてここへ腰を掛けなさいまアと言いつつ、

藁わらを積んである所へ自分も腰をかけて僕にも掛けさせた。

「政夫さん……お民さんはほんとに可哀相でしたよ。うちの姉さんたらほんとに意地曲りですからネ。何という根性の悪い人だか、私もはアこのうちに居るのは厭になつてしまった。昨日政夫さんが来るのは解りきつて居るのに、姉さんがいろんなことを云つて、一昨日お民さんを市川へ帰したんですよ。待つ人があるだつぺとか逢いたい人が待ちどおかつぺとか、当こすりを云つてお民さんを泣かせたりしてネ、お母さんにも何でもいろいろなこと言つたらしい、とうとう一昨日お昼前に帰してしまつたのでさ。政夫さんが一昨日きたら逢われたんですよ。政夫さん、私はお民さんが可哀相で可哀相でならないだよ。何だつてあなたが居なくなつてからはまるで泣きの涙で日を暮らして居るんだもの、政夫さんに手紙をやりたいけれど、それが

よく自分には出来ないから口惜しいと云つてネ。私の部屋へ三晩も硯すずりと紙を持ってきては泣いて居ました。お民さんも始まりは私にも隠していたけれど、後には隠して居られなくなつたのさ。私もお民さんのためにいくら泣いたか知れない……」

見ればお増はもうぽろぽろ涙をこぼしている。一体お増はごく人のよい親切な女で、僕と民子が目の前で仲好い風をすると、嫉妬しつとん心を起すけれど、もとより執念深い性でないから、民子が一人になれば民子と仲が好く、僕が一人になれば僕を大騒ぎするのである。

それからなおお増は、僕が居ない跡で民子が非常に母に叱られたことなどを話した。それは概略こうである。意地悪あによめの嫂あによめが何を言うても、母が民子を愛することは少しも変らないけれど、二つも年の多い民子を僕の嫁にすることはどうしてもいけぬと

云うことになつたらしく、それには嫂もいろいろ言うて、嫁にしないとすれば、二人の仲はなるたけ裂く様な工夫をせねばならぬ。母も嫂もそういう心持になつて居るから、民子に対する仕向けは、政夫のことを思うて居ても到底駄目であると遠廻しに諷示ふうじして居た。そこへきて民子が明けてもくれてもよくよして、人の眼にもとまるほどであるから、時々は物忘れをした^り、呼んでも返辞が遅かつたりして、母の疝癩かんしやくにさわつたことも度々あつた。僕が居なくなつてから二十日許り経つて十一月の月初めの頃、民子も外の者と野へ出るこゝとなつて、母が民子にお前は一足跡になつて、座敷のまわりを雑巾掛ぞうきんがけしてそれから庭に広げてある蓆むしろを倉へ片づけてから野へゆけと言いつけた。民子は雑巾がけをしてからうつかり忘れてしまつて、蓆を入れずに野へ出た処、間がわるくその日雨が降つたから、その蓆十

枚ばかりを濡らしてしまった。民子は雨が降ってから気がついたけれど、もう間に合わない。うちへ帰って早速母に詫^わびたけれど母は平日の事が胸にあるから、

「何も十枚ばかりの蓆が惜しいではないけれど、一体私の言いつけを疎^{おろそ}かに聞いているから起ったことだ。もとの民子はそうでなかつた。得手勝手な考えごとなどしているから、人の言うことも耳へ這^{はい}入らないのだ……」

という様な随分痛い小言を云つた。民子は母の枕元近くへいつて、どうか私が悪かつたのですから堪^{かんにん}忍して……と両手をついてあやまつた。そうすると母はまたそう何も他人らしく改まつてあやまらなくなるともだと叱つたそうで、民子はたまらなくなつてワツと泣き伏した。そのまま民子が泣きやんでしまえば何のこともなく済んだであらうが、民子はとうとう一晚中泣きとお

したので翌朝は眼を赤くして居た。母も夜時々眼をさましてみると、民子はいつでも、すすすす泣いている声かしていたというので、今度は母が非常に立腹して、お増と民子と二人呼んで母が顫声ふるふるこゑになつて云うには、

「あいたい相對では私がどんな我儘なことを云うかも知れないからお増は聞人ききてになつてくれ。民子はゆうべ一晚中泣きとおした。定めし私に云われたことが無念でたまらなかつたからでしょう」

民子はここで私はそうでありませんと泣声でいうたけれど、母は耳にもかけずに、

「なるほど私の小言も少し云い過ぎかも知れないが、民子だつて何もそれほど口惜くやしがつてくれなくてもよさそうなものじゃないか。私はほんとに考えると情なくなつてしまった。かわいがつたのを恩に着せるではないが、もとを云えば他人だけけれど、

乳呑児ちのみじの時から、民子はしよつちゅう家へきて居て今の政夫と二つの乳房を一つ宛ずつ含ませて居た位、お増がきてからもあの通りで、二つのものは一つ宛四つよっつのものは二つ宛、着物を拵そろえてもあれに一枚これに一枚と少しも分け隔てをせないできた。民子も真の親の様に思つてくれ私も吾子と思つて余所の人は誰だつて二人を兄弟と思わないものはなかつたほどであるのに、あとにも先にも一度の小言をあんなに悔しがつて夜中泣いて呉れなくともよさそうなもの。市川の人達に聞かれたらば、斎藤ばあの婆ばあがどんな非度ひどいことを云つたかと思ふだろう。十何年という間我子の様に思つてきたこともただ一度の小言で忘れられてしまつたかと思うと私は口惜しい。人間というものはそうしたものかしら。お増、よく聞いてくれ、私が無理か民子が無理か。なアお増」

母は眼に涙を一ぱいに溜めてそういった。民子は身も世もあらぬさまでいきなりにお増の膝へすがりついて泣き泣き、

「お増や、お母さんに申訣をしておくれ。私はそんなだいそれた了簡りようけんではない。ゆんべあんなに泣いたは全く私が悪かったから、全く私がとどかなかったのだから、お増や、お前がよく申訣をそういつておくれ……」

それからお増が、

「お母さんの御立腹も御尤もですけれど、私が思うにやお母さんも少し勘違いをして御いでなさいます。お母さんは永年お民さんをかわいがつて御いでですから、お民さんの氣質きだては解つて居りましょう。私もこうして一年御厄介になつて居てみれば、お民さんはほんと優しい温和おとなしい人です。お母さんに少し許り叱られたつて、それを悔しがつて泣いたりなんぞする様な人では

ありますまい。私がこんなことを申してはおかしいですが、政夫さんとお民さんとは、あアして仲好くして居たのを、何かの御都合で急にお別れなさったもんですから、それからというもの、お民さんは可哀相なほど元気がないのです。木の葉のそよぐにも溜息ためいきをつき鳥からずの鳴くにも涙ぐんで、さわれば泣きそうなく風でいたところへ、お母さんから少しきつく叱られたから留度とめどなく泣いたのでしょう。お母さん、私は全くそう思いますわ。お民さんは決してあなたに叱られたとて悔しがるような人ではありません。お民さんの様な温和しい人を、お母さんの様にあアいつて叱つては、あんまり可哀相ですわ」

お増が共泣きをして言訣をいうたので、もとより民子は憎くない母だから、俄に顔色を直して、

「なるほどお増がそういえば、私も少し勘違いをしていました。

よくお増そういうてくれた。私はもうすつかり心持がなおつた。民や、だまつておくれ、もう泣いてくれるな。民やも可哀相であつた。なに政夫は学校へ行つたんじゃないか、暮には帰つてくるよ。なアお増、お前は今日は仕事を休んで、うまい物でも拵こしらえてくれ」

その日は三人がいく度もよりあつて、いろいろな物を拵こしらへては茶ごとをやり、一日面白く話をした。民子はこの日はいつになく高笑いをし元気よく遊んだ。何と云つても母の方は直ぐ話が解るけれど、嫂まが間すきがな種々いろいろなことを言うので、とうとう僕の帰らない内に民子を市川へ帰したとの話であつた。お増は長い話を終るや否やすぐ家へ帰つた。

なるほどそうであつたか、姉は勿論母までがそういう心になつたでは、か弱い望も絶えたも同様。心細さやるせの遺瀬せがなく、泣く

より外に詮せんがなかつたのだらう。そんなに母に叱せられたか……
一晩中泣きとおした……なるほどなどと思うと、再び熱い涙がみなぎ
漲り出してとめどがない。僕はしばらくの間、涙の出るがまま
にそこにぼんやりして居た。その日はとうとう朝飯もたべず、
昼過ぎまで畑のあたりをうろついてしまった。

そうなるにわかと俄に家に居るのが厭でたまらない。出来るならば
暮の内に学校へ帰ってしまいたかつたけれど、そうもならない
でようやくこらえて、年を越し元日一日置いて二日の日には朝
早く学校へ立ってしまった。

今度は陸路市川へ出て、市川から汽車に乗ったから、民子の
近所を通つたのであれど、僕は極りが悪くてどうしても民子の
家へ寄れなかつた。また僕に寄られたらば、民子が困るだろう
とも思つて、いくたび寄ろうと思つたけれどついに寄らなかつ

た。

思えば実に人の境遇は変化するものである。その一年前までは、民子が僕の所へ来て居なければ、僕は日曜のたびに民子の家へ行ったのである。僕は民子の家へ行っても外の人には用はない。いつでも、

「お祖母さん、民さんは」

そら「民さんは」が来たといわれる位で、或る時などは僕がゆくと、民子は庭に菊の花を摘んで居た。僕は民さん一寸御出でと無理に背戸へ引張つて行つて、二間梯子にけんぼしごを二人で荷にない出し、柿の木へ掛けたのを民子に抑えさせ、僕が登つて柿を六個許りむつつとる。民子に半分やれば民子は一つで沢山というから、僕はその五つを持ってそのまま裏から抜けて帰つてしまった。さすがにこの時は戸村の家でも家中で僕を悪く言つたそうだけれど、

民子一人はただにこにこ笑つて居て、決して政夫さん悪いとは言わなかつたそうだ。これ位隔てなくした間柄だに、恋ということ覚えてからは、市川の町を通るすら恥はずかしくなつたのである。

この年の暑中休みには家に帰らなかつた。暮にも帰るまいと思つたけれど、年の暮だから一日でも二日でも帰れというて母から手紙がきた故、大三十日の夜帰つてきた。お増も今年きりさがで下つたとの話でいよいよ話相手もないから、また元日一日で二日の日に出掛けようとする、母がお前にも言うて置くが民子は嫁に往いつた、去年の霜月やはり市川の内、大変裕福な家だそうだと簡単にいうのであつた。僕はアそうですかと無造作に答えて出てしまつた。

民子は嫁に往つた。この一語を聞いた時の僕の心持は自分な

がら不思議と思うほどの平気であつた。僕が民子を思っている感情に何らの動揺を起さなかつた。これには何か相当の理由があるかも知れねど、ともかくも事實はそうである。僕はただ理窟なしに民子は如何な境涯に入ろうとも、僕を思っている心は決して変らぬものと信じている。嫁にいこうがどうしようが、民子は依然民子で、僕が民子を思う心に寸分の変りない様に民子にも決して変りない様に思われて、その観念は殆ど大石の上に坐して居る様で毛の先ほどの危惧きぐしん心もない。それであるから民子は嫁に往つたと聞いても少しも驚かなかつた。しかしその頃から今までにない考えも出て来た。民子はただただ少しも元気がなく、瘦衰やせえて鬱ふさいで許り居るだろうとのみ思われてならない。可哀相な民さんという観念ばかり高まつてきたのである。そういう訣であるから、学校へ往つても以前とは殆ど反対になつて、

以前は勉めて人中へ這入つて、苦悶を紛らそうとしたけれど、今度はなるべく人を避けて、一人で民子の上に思いを馳はせて楽しんで居つた。茄子畑の事や棉畑わたばたけの事や、十三日の晩の淋しい風や、また矢切の渡で別れた時の事を、繰返し繰返し考えては独り慰めて居つた。民子の事さえ考えればいつでも気分がよくなる。勿論悲しい心持になることがしばしばあるけれど、さうざん涙を出せばやはり跡は気分がよくなる。民子の事を思つて居ればかえつて学課の成績も悪くないのである。これらも不思議の一つで、如何なる理由か知らねど、僕は実際そうであつた。

いつしか月も経つて、忘れもせぬ六月二十二日、僕が算術の解題に苦んで考えて居ると、小使が斎藤さんおうちから電報で

す、と云つて机の端へ置いて去つた。例のスグカエレであるから、早速舎監に話をして即日帰省した。何事が起つたかと胸に動悸をはずませて帰つて見ると、宵闇よいやみの家の有様は意外に静かだ。台所で家中夕飯時であつたが、ただそこに母が見えない許り、何の変つた様子もない。僕は台所へは顔も出さず、直ぐと母の寢所へきた。行燈あんどんの灯ひも薄暗く、母はひつたり枕に就いて臥ふせつて居る。

「お母さん、どうかしましたか」

「あア政夫、よく早く帰つてくれた。今私も起きるからお前御飯前なら御飯を済ましてしまえ」

僕は何のことか頻しきりに気になるけれど、母がそういうまゝに早々に飯をすまして再び母の所へくる。母は帯を結ゆうて蒲団の上上に起きていた。僕が前に坐つてもただ無言でいる。見ると母

は雨の様な涙を落して俯向うつむいている。

「お母さん、まあどうしたんでしょう」

僕の詞に励まされて母はようやく涙を拭き、

「政夫、堪忍してくれ……。民子は死んでしまった……。私が殺した様なものだ……」

「そりゃいつです。どうして民さんは死んだんです」

僕が夢中になって問返すと、母は嗚咽むせび返って顔を抑えて居る。

「始終をきいたら、定めし非度ひどい親だと思っただろうが、こらえてくれ、政夫……。お前に一言の話もせず、たつていやだと言う民子を無理に勧めて嫁にやったのが、こういうことになってしまった……。たとい女の方が年上であろうとも本人同志が得心であれば、何も親だからとて余計な口出しをせなくもよいのに、

この母が年甲斐もなく親だてらにいらぬお世話を焼いて、取返しをつかぬことをしてしまつた。民子は私が手を掛けて殺したも同じ。どうぞ堪忍してくれ、政夫……私は民子の跡追つてゆきたい……」

母はもうおいおいおいおい声を立てて泣いている。民子の死ということだけは判つたけれど、何が何やら更に判らぬ。僕とて民子の死と聞いて、失神するほどの思いであれど、今日の前で母の嘆きの一通りならぬを見ては、泣くにも泣かれず、僕がおろおろしている所へ兄夫婦が出てきた。

「お母さん、まアそう泣いたつて仕方がない」

と云えば母は、かまわずに泣かしておくれ泣かしておくれと云うのである、どうしようもない。

その間で嫂が僅わずかに話す所を聞けば、市川の某それがしという家で先の男

の気性も知れているに財産も戸村の家に倍以上であり、それで向うから民子を強^たつての所望、媒^{なこうど}人というのも戸村が世話になる人である、是非やりたい是非往つてくれということになつた。民子はどうでもいやだと云う。民子のいやだという精神^{こころ}はよく判っているけれど、政夫さんの方は年も違い先の永いことだから、どうしても某の家へやりたいとは、戸村の人達は勿論親類までの希望であつた。それでいよいよ斎藤のおツ母さんに意見をして貰うということに相談が極り、それで家のお母さんが民子に幾度意見しても泣いてばかり承知しないから、とどのつまり、お前がそう剛情はるのも政夫の処へきたい考えからだろうけれど、それはこの母が不承知でならないよ、お前はそれでも今度の縁談が不承知か。こんな風に言われたから、民子はすっかり自分をあきらめたらしく、とうとう皆様のよい様にといつ

て承知をした。それからは何もかも他の言うなりになつて、霜ななかば月半に祝儀をしたけれど、民子の心持がほんとうの承知でないから、向うでもいくらかいや気になり、民子は身持になつたが、むつき六月でおりてしまった。跡の肥立ちが非常に悪くついに六月十九日に息を引き取つた。病中僕に知らせようとの話もあつたが、今更政夫に知らせる顔もないという訣から知らせなかつた。家のお母さんは民子が未だ口をきく時から、市川へ往つて居つて、民子がいけなくなると、もう泣いて泣いて泣きぬいた。一口まぜに、民子は私が殺した様なものだ、とばかりいつて居て、市川へ置いたではどうなるか知れぬという訣から、昨日車で家へ送られてきたのだ。話さえすれば泣く、泣けば私が悪かつた悪かつたと云つて居る。誰にも仕様がないから、政夫さんの所へ電報を打つた。民子も可哀相だしお母さんも可哀相だし、飛ん

だことになつてしまつた。政夫さん、どうしたらよいでしょう。
あによめ
嫂の話で大方は判つたけれど、僕もどうしてよいやら殆ど途方にくれた。母はもう半氣違いだ。何しろここでは母の心を静めるのが第一とは思つたけれど、慰めようがない。僕だつていっそ氣違ひになつてしまつたらと思つた位だから、母を慰めるほどの氣力はない。そうこうしている内にようやく母も少し落着いてきて、また話し出した。

「政夫や、聞いてくれ。私はもう自分の悪党にあきれてしまつた。何だつてあんな非度ひどいことを民子に言つたつけかしら。今更なんぼ悔いても仕方がないけど、私は政夫……民子にこう云つたんだ。政夫と夫婦にすることはこの母が不承知だからおまえは外へ嫁に往け。なるほど民子は私にそう云われて見れば自分の身を諦あきらめる外はない訣だ。どうしてあんな酷むじたらしいことを

云つたのだろう。ああ可哀相な事をしてしまった。全く私が悪党を云うた為に民子は死んだ。お前はネ、明朝は夜が明けたら直ぐに往つてよ。よく民子の墓に参つてくれ。それでお母さんの悪かつたことをよく詫びてくれ。ね、政夫」

僕もようやく泣くことが出来た。たといどういふ都合があつたにせよ、いよいよ見込がなくなつた時には逢わせてくれてもよかつたらうに、死んでから知らせるとは随分非度い訣だ。民さんだつて僕には逢いたかつたらう。嫁に往つてしまつては申訣がなく思つたらうけれど、それでもいよいよの真際まぎわになつては僕に逢いたかつたに違いない。実に情ない事だ。考えて見れば僕もあんまり児供であつた。その後市川を三回も通りながらたずねなかつたは、今更残念でならぬ。僕は民子が嫁にゆこうがゆくまいが、ただ民子に逢いさえせばよいのだ。今一目逢い

たかつた……次から次と果てしなく思いは溢れてくる。しかし母にそういうことを言えば、今度は僕が母を殺す様なことになるかも知れない。僕は屹きつと心を取り直した。

「お母さん、真ほんとに民子は可哀相でありました。しかし取つて返らぬことをいくら悔んでも仕方がないですから、跡の事を懇ねんごろにしてやる外はない。お母さんはただただ御自分の悪い様にばかりとつているけれど、お母さんとして精神こころはただ民子のため政夫のためと一筋に思つてくれた事ですから、よしそれが思う様にならなかつたとして、民子や私等が何としてお母さんを恨みましよう。お母さんの精神はどこまでも情心なさけごころでしたものを、民子も決して恨んではいやしまい。何もかもこうなる運命であつたのでしよう。私はもう諦めました。どうぞこの上お母さんも諦めて下さい。明日の朝は夜があけたら直ぐ市川へ参ります」

母はなお詞を次いで、

「なるほど何もかもこうなる運命かも知らねど今度という今度私はよくよく後悔しました。俗に親馬鹿という事があるが、その親馬鹿が飛んでもない悪いことをした。親がいつまでも物の解ったつもりで居るが、大へんな間違いであつた。自分は阿弥陀あみだ様におすがり申して救うて頂く外に助かる道はない。政夫や、お前は体を大事にしてくれ。思えば民子はなが年の間にもついで私にさからつたことはなかつた、おとなしい児であつただけ、自分のした事が悔いられてならない、どうしても可哀相でたまらない。民子が今はの時の事もお前に話して聞かせたいけれど私にはとてもそれが出来ない」

などとまた声をくもらしてきた。もう話せば話すほど悲しくなるからとて強しいて一同寝ることにした。

母の手前兄夫婦の手前、泣くまいとこらえてようやくこらえていた僕は、自分の蚊帳かやへ這入り蒲団に倒れると、もうたまたまなく一度にこみ上げてくる。口へは手拭を噛んで、涙を絞った。どれだけ涙が出たか、隣室の母から夜が明けた様だよと声を掛けられるまで、少しも止まず涙が出た。着たまままで寝ていた僕はそのまま起きて顔を洗うや否や、未だほの闇ぐらいの家に出来る。夢のように二里の路を走って、太陽がようやく地平線に現われた時分に戸村の家の門前まで来た。この家の竈かまどのある所は庭から正面に見透して見える。朝炊あさだきに麦藁あわを焚たいてパチパチ音がする。僕が前の縁先に立つと奥に居たお祖母おばあさんが、目敏めさとく見つけて出てくる。

「かねや、かねや、とみや……政夫さんが来ました。まア政夫さんよく来てくれました。大そう早く。さアお上んなさい。起

き抜きでしょう。さア……かねや……」

民子のお父さんとお母さん、民子の姉さんも来た。

「まアよく来てくれました。あなたの来るのを待っていました。とにかくに上つて御飯をたべて……」

僕は上りもせず腰もかけず、しばらく無言で立っていた。ようやくと、

「民さんのお墓に参りにきました」

切なる様は目に余つたと見え、四人とも口がきけなくなつて

しまった。……やがてお父さんが、

「それでもまア一寸御飯を済して往つたら……あアそうですか。それでは皆して参つてくるがよかろう……いや着物など着替えんでよいじゃないか」

女達は、もう鼻^{はな}吸^{すす}りをしながら、それじゃアとて立ちあがる。

水を持ち、線香を持ち、庭の花を沢山に採る。小田巻草千日草てんじくぼたん天竺牡丹めいめいと各々手にとり別けて出かける。柿の木の下から背戸まきべいへ抜け槇屏の裏門を出ると松林である。桃畑梨畑の間をゆくと僅の田がある。その先の松林の片隅に雑木の森があつて数多あまたの墓が見える。戸村家の墓地は冬青もちのき四五本を中心として六坪許りを区別けしてある。そのほどよい所の新墓にいばかりが民子が永久とわの住家すみかであつた。葬ほうむりをしてから雨にも逢わないので、ほんの新らしいままで、力紙ちからがみなども今結んだ様である。お祖母さんが先に出でて、

「さア政夫さん、何もかもあなたの手でやって下さい。民子のためにほんは真ほんに千僧の供養にまさるあなたの香花こうげ、どうぞ政夫さん、よおくお参りをして下さい……今日は民子も定めて草葉の蔭で嬉しかろう……なあ此人にせめて一度でも、目をねむらな

い民子に……まあせめて一度でも逢わせてやりたかった……」

三人は眼をこすっている様子。僕は香を上げ花を上げ水を注いでから、前に蹲つくばって心のゆくまで拝んだ。真しんに情ない訣だ。寿命で死ぬは致方ないにしても、長く煩わずらって居る間に、ああ見舞ってやりたかった、一目逢いたかった。僕も民さんに逢いたかったもの、民さんだつて僕に逢いたかったに違いない。無理に強しいられたとは云え、嫁に往つては僕に合わせる顔がないと思つたに違いない。思えばそれが愍然あわれでならない。あんな温和おとなしい民さんだもの、両親から親類中かかつて強いられ、どうしてそれが拒まれよう。民さんが気の強い人ならきつと自殺をしたのだけれど、温和しい人だけにそれも出来なかつたのだ。民さんは嫁に往つても僕の心に変りはないと、せめて僕の口から一言いつて死なせたかった。世の中に情ないといつてこうい

う情ないことがあるうか。もう私も生きて居たくない……吾知らず声を出して僕は両膝ひざと両手を地べたへ突いてしまった。

僕の様子を見て、後に居た人がどんなに泣いたか。僕も吾一人でないに気がついてようやく立ちあがった。三人の中の誰がいうのか、

「なんだつて民子は、政夫さんということをば一言も言わなかったのだらう……」

「それほどに思い合つてる仲と知つたらあんなに勧めはせぬものを」

「うすうすは知れて居たのだに、この人の胸も聞いて見ず、民子もあれほどいやがったものを……いくら若いからとてあんなりであつた……可哀相に……」

三人も香花を手向け水たむを注いだ。お祖母さんがまた、

「政夫さん、あなた力紙を結んで下さい。沢山結んで下さい。民子はあなたが情の力を便りにあの世へゆきます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

僕は懐ふとしろにあつた紙の有りたけを力杖に結ぶ。この時ふつと気がついた。民さんは野菊が大変好きであつたに野菊を掘つてきて植えればよかつた。いや直ぐ掘つてきて植えよう。こう考へてあたりを見ると、不思議に野菊が繁つてる。吊いの人に踏まれたらしいがなお莖立つて青々として居る。民さんは野菊の中へ葬られたのだ。僕はようやく少し落着いて人々と共に墓場を辞した。

僕は何にもほしくありません。御飯は勿論茶もほしくありません、このままお暇願います、明日はまた早く上りますからといつ

て帰ろうとすると、家中うちじゆうで引留める。民子のお母さんはもうたまらなそうな風で、

「政夫さん、あなたにそうして帰られては私等は居ても起つてもいられません。あなたが面白くないお心持は重々察しています。考えてみれば私どもの届かなかつたために、民子にも不憫ふびんな死にようをさせ、政夫さんにも申訣のないことをしたのです。私共は如何様にもあなたにお詫びを致します。民子可哀相おぼしめと思召したら、どうぞ民子が今はの話も聞いて行つて下さいな。あなたがお出いでになつたら、お話し申すつもりで、今日はお出でか明日はお出でかと、実は家中がお待ち申したのですからどうぞ……」

そう言われては僕も帰る訣にゆかず、母もそう言ったのに気がついて座敷へ上つた。茶や御飯やと出されたけれども真似ばかりで済まず。その内に人々皆奥へ集りお祖母さんが話し出し

た。

「政夫さん、民子の事については、私共一同誠に申訳がなく、あなたに合わせる顔はないのです。あなたに色々御無念な処もありましようけれど、どうぞ政夫さん、過ぎ去った事と諦めて、御勘弁を願います。あなたにお詫びをするのが何より民子の供養になるのです」

僕はただもう胸一ぱいで何も言うことが出来ない。お祖母さんは話を続ける。

「実はと申すと、あなたのお母さん始め、私また民子の両親とも、あなたと民子がそれほど深い間なかであったとは知らなかつたもんですから」

僕はここで一言いいだす。

「民さんと私と深い間とおっしゃっても、民さんと私とはどう

もしやしません」

「いえ、あなたと民子がどうしたと申すではないのです。も
とからあなたと民子は非常な仲好しでしたから、それが判らな
かったんです。それに民子はあの通りの内気な児でしたから、
あなたの事は一言も口に出さない。それはまるきり知らなかつ
たとは申されません。それですからお詫びを申す様な訣……」

僕は皆さんにそんなにお詫びを云われる訣はないという。民
子のお父さんはお詫びを言わしてくれという。

「そりや政夫さんのいうのは御もつともです、私共が勝手なこと
をして、勝手なことをお前さんに言うというものですが、政夫さ
ん聞いて下さい、理窟の上のことではないです。男親の口から
こんなことをいうも如何いかがですが、民子は命に替えられない思い
を捨てて両親の希望に従ったのです。親のいいつけで背そむかれな

いと思つても、道理で感情を抑えるは無理な処もありましょう。民子の死は全くそれ故ですから、親の身になつて見ると、どうも残念でありまして、どうもしやしませんと政夫さんが言う通り、お前さん等^{たち}二人に何の罪もないだけ、親の目からは不憫が一層でな。あの通り温和^{おとな}しかつた民子は、自分の死ぬのは心柄とあきらめてか、ついで一度不足らしい風も見せなかつたです。それやこれやを思ひますとな、どう考えてもちと親が無慈悲であつた様で……。政夫さん、察して下さい。見る通り家中がもう、悲しみの闇に鎖^{とぎ}されて居るのです。愚かなことでしょうがこの場合お前さんに民子の話を聞いて貰うのが何よりの慰藉^{いしや}に思われますから、年がいもないこと申す様だが、どうぞ聞いて下さい」

お祖母さんがまた話を続ける。結婚の話からいよいよむずか

しくなつたまでの話は嫂が家での話と同じで、今はという日の話はこうであつた。

「六月十七日の午後に医者が出て、もう一日二日の処だから、親類などに知らせるならば今日中にも知らせるがよいと言いますから、それではとて取敢とりあえずあなたのお母さんに告げると十八日の朝飛んできました。その日は民子は顔色がよく、はつきりと話も致しました。あなたのおつかさんがきまして、民や、決して気を弱くしてはならないよ、どうしても今一度なおる氣になつておくれよ、民や……民子はにつこり笑顔さえ見せて、矢切やぎりのお母さん、いろいろ有難う御座います。長長可愛がつて頂いた御恩は死んでも忘れません。私も、もう長いことはありますまい……。民や、そんな氣の弱いことを思つてはいけない。決してそんなことはないから、しつかりしなくてはいけないと、あな

たのお母さんが云いましたら、民子はしばらくたつて、矢切のお母さん、私は死ぬが本望であります、死ねばそれでよいのです……といひましてからなお口の内では何か言つた様で、何でも、政夫さん、あなたの事を言つたに違ひないですが、よく聞きとれませんでした。それきり口はきかないで、その夜の明方に息を引取りました……。それから政夫さん、こういう訣です……。夜が明けてから、枕を直させます時、あれの母が見つめました、民子は左の手に紅絹もみの切れに包んだ小さな物を握つてその手を胸へ乗せているのです。それで家中の人が皆集つてそれをどうしようかと相談しましたが、可哀相なような気持もするけれど、見ずに置くのも気にかかる、とにかく開いて見るがよいと、あれの父が言い出しまして、皆の居る中であけました。それが政夫さん、あなたの写真とあなたのお手紙でありまして……」

お祖母さんが、泣き出して、そこにいた人皆涙を拭いている。僕は一心に畳を見つめていた。やがてお祖母さんがようよう話を次ぐ。

「そのお手紙をお富が読みましたから、誰も彼も一度に声を立て泣きました。あれの父は男ながら大声して泣くのです。あなたのお母さんは、気がふれはしないかと思うほど、口説くどいて泣く。お前達二人がこれほどの語らいとは知らずに、無理無体に勧めて嫁にやったは悪かった。ああ悪いことをした、不憫むくわんだった。民や、堪忍して、私は悪かったから堪忍してくれ。俄にわかの騒ぎですから、近隣の人達が、どうしましたと云って尋ねにきた位でありました。それであなたのお母さんはどうしても泣き止まないです。体に障さわつてはと思ひまして葬式が済むと車で御送り申した次第です。身を諦めた民子の心持が、こう判つて見る

と、誰も彼も同じことで今更の様に無理に嫁にやった事が後悔され、たまらないですよ。考えれば考えるほどあの児が可哀相で可哀相で居ても起^たつても居られない……せめてあなたに来て頂いて、皆が悪かったことを十分あなたにお詫^わびをし、またあれの墓にも香花^{こうげ}をあなたの手から手向けて頂いたら、少しは家中の心持も休まるかと思ひまして……今日のことをなんぼうちましたろ。政夫さん、どうぞ聞き分けて下さい。ね、民子はあなたにはそむいては居ません。どうぞ不憫と思つて下さい……」

一語一句皆涙で、僕も一時泣きふしてしまった。民子は死ぬのが本望だと云つたか、そういつたか……家の母があんなに^二身を責めて泣かれるのも、その筈であつた。僕は、「お祖母さん、よく判りました。私は民さんの心持はよく知つ

ています。去年の春、民さんが嫁にゆかれたと聞いた時でさえ、私は民さんを毛ほども疑わなかつたですもの。どの様なことがあろうとも、私が民さんを思う心持は変わりません。家の母などもただそればかり言つて嘆いて居ますが、それも皆悪気があつての業わざでないのですから、私は勿論民さんだつて決して恨みに思やしません。何もかも定まつた縁と諦めます。私は当分毎日お墓へ参ります……」

話しては泣き泣いては話し、甲一語乙一語いくら泣いても果てしがない。僕は母のことも気にかかるので、もうお昼だという時分に戸村の家を辞した。戸村のお母さんは、民子の墓の前で僕の素振りが余り痛わしかつたから、途中が心配になると、自分で矢切の入口まで送つてきてくれた。民子の慙然あわれなことはいくら思うても思いきれない。いくら泣いても泣ききれない。

しかしながらまた目の前の母が、悔悟の念に攻められ、自ら大罪を犯したと信じて嘆いて居る愍然あわれさを見ると、僕はどうしても今は民子を泣いては居られない。僕がめそめそして居つたでは、母の苦しみは増すばかりと気がついた。それから一心に自分で自分を励まし、元気をよそおうてひたすら母を慰める工夫をした。それでも心にない事は仕方のないもの、母はいつしかそれと気がついてる様子、そうなつては僕が家に居ないより外はない。

毎日七日なぬかの間市川へ通つて、民子の墓の周囲には野菊が一面に植えられた。その翌あくる日に僕は十分母の精神の休まる様に自分の心持を話して、決然学校へ出た。

*

*

*

民子は余儀なき結婚をして遂に世を去り、僕は余儀なき結婚をして長らえている。民子は僕の写真と僕の手紙とを胸を離さず^{はる}に持って居よう。幽明遙^{はる}けく隔つとも僕の心は一日も民子の^{はる}上を去らぬ。

後註

- 一 「続ける」は底本では「読ける」
- 二 「あんなに」は底本では「あんに」

野菊の墓

底本：「日本文学全集別巻 1 現代名作集」河出書房

入力：kaku

校正：伊藤時也

1999年1月6日公開

2005年11月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。